の朝

立原正秋

雪の朝

一九七八年二月一二日　初版発行
一九七八年三月三〇日　二版発行

定価　八五〇円
著者　立原正秋
発行者　堀内末男
発行所　株式会社　集英社
東京都千代田区一ッ橋二―五―一〇
郵便番号　一〇一
電話　出版部二三〇―六三六一
販売部二三〇―六一七一
印刷所　大文堂印刷株式会社
検印廃止
乱丁・落丁本はお取替いたします

©1978 M. TACHIHARA
0093-772131-3041

目次

行く川　五
錆鮎　七一
山椒の木のある家　一三一
雪の朝　一五三
埋れ水　一八五
あとがき　二〇六

装丁　麻田鷹司

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

雪の朝

行く川

一

ひどい顔をしている、と鶴子は浩吉に叩かれながら思った。

「てめえにはな、だいたい貞操観念ってのがねえんだ！　おい、そうだろう。亭主がありながら、俺といちゃつき、あげくに俺と京都まで駆けおちしてよ、貞操観念がありゃ、そんなことが出来るはずがねえ。おい、そうだろう」

酔った浩吉は、ところかまわず打ってきた。いままで同じことを何度言われたことか。酔った浩吉を鎮めるてだてはなかった。浩吉はほんとにひどい顔をしていた。女の軀を愛撫するときに見せるあの顔が、こんなにも変貌するものか。鶴子は打たれながらも、貞操観念とはなにか、としきりに頭の一隅で考えていた。

鶴子は打たれてもいつも我慢をしていた。そして我慢の限度がすぎると、つと軀を躱(かわ)して部屋から逃れて表にでる。顔だけは殴られないようにいつも両掌でかくしてい

るので、背中や腰や腕が痛い。浩吉は大声をあげず、ちびりちびりといびるのであった。六十歳の男が、なぜあんないびり方を見せるのだろうか。彼が怒りだすのはいつも突発的だった。

正午をすこしまわった時刻で、「ひらやま」はすでに暖簾をかけていたが、鶴子が表に逃れながら店のなかをちらとのぞくと、客はまだきていなかった。二人の板前が魚を割いていた。浩吉は、自分の苗字の平山を店の屋号にしていた。

三月はじめにしてはあたたかすぎる日だった。家をでてきても、行くところは、店からそう遠くない相模川の岸か、ひらやまのとなりの料理屋の馬入しかない。

鶴子は駒下駄を小刻みに鳴らして河口の方にむかって歩いた。

相模川は、富士山麓の山中湖を発源として丹沢山塊の北側を流れる道志川となり、津久井湖に入って、相模中部を北から南に横断して相模湾に注いでいる。河口は平塚と茅ヶ崎にはさまれ、むかしから馬入川とよばれている。

なぜ河口が馬入川とよばれているのか、鶴子は知らない。鶴子は、浩吉から、貞操

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

観念がない女だと罵られ、自分がわからなくなると、よく馬入川を眺めに行った。

鶴子は、津久井郡の梶野という村でうまれた。道志川を目の前にのぞむ余り裕福ではないが美しい村である。

鶴子が河口の流れを見に行くのは、心のどこかで、自分のうまれた村の川の流れを求めていたからかも知れない。

河口の水は濁っており、道志川の川底の石肌が透けて見える清冽な流れとは比ぶべくもなかったが、それでも流れを視つめていると、ああ、この水は、あの村を通ってここまで辿りついたんだな、というおもいが胸に充ち、気持が和んでくるのであった。

河口は海からの風で冷たかった。真昼の陽ざしのもとで流れも海も光っており、江ノ島がはっきり見えた。陽の光がつぶらで、丹沢山脈もくっきり稜線を見せていた。

鶴子が流れをみにくるのは、自分のうまれた村の川の流れを求めていたからかも知れなかったが、しかし一方では、対岸の茅ヶ崎に心惹かれている面があった。去年の秋のはじめ、桔梗家の野田明平のもとを出ていらい、鶴子は茅ヶ崎には行っていない。

三十六歳の鶴子が、四十八歳の野田明平を捨て、六十歳の平山浩吉と駆けおちしたのは、鶴子が自らえらんだ道であった。それなのに、いまになり何故桔梗家が恋しいのか。

桔梗家はバーであった。鶴子は石女(うまずめ)で、こうして家にじっとしていても退屈だから、お店にでてみようかしら、と鶴子が言いだしたのが三年前であった。明平が同意してくれたので、鶴子は桔梗家のママになった。明平は、辻堂にも桔梗家の支店をもっていた。本職は建築士であったが、道楽半分ではじめたバーが当り、けっこう好い客がついた。

鶴子の生家は、茅ヶ崎で材木屋をやっていた。津久井の田舎から出てきたのは、鶴子が小学校三年生のときで、昭和十四年の夏であった。鶴子が建築士の野田明平のもとに輿入れしたのは、材木屋と建築士というつながりのもとに、両家が親しくしていた関係からであった。鶴子二十六歳の秋であった。鶴子は、東京の私立女子大の家政学科をでていた。野田明平はやはり私大の工学部をでていた。二人は似合いの夫婦で

あった。茅ヶ崎の海岸にちかい閑静な場所に、明平が設計した新居に二人は落ちついた。どの面からみてもこの夫婦に不安はないはずであった。

いまの鶴子は、店にでたのがあやまりであったのか、と思う。桔梗家は繁盛していた。客の一人に、平塚で、ひらやま、という活魚料理屋をやっている平山浩吉がいた。若いときはいなせな衆だったろうと思われる好い男だった。六十という年齢を感じさせない男であった。ひらやまは朝の十時に店をあけ、夜の十時に暖簾をしまう。浩吉が桔梗家に現われるのは十時すぎであった。平塚からタクシーで来れば茅ヶ崎まで十分とはかからない。明平は二軒のバーを女にまかせ、自分は建築の仕事に精だしていた。建売住宅が面白いように儲かるので、鶴子が浩吉を知った頃、明平はそっちの方に精をだし、妻を顧みなかった。

ある日、明平は、静岡まで泊りがけの仕事に出かけ、その日は帰らない予定であった。鶴子と浩吉のあいだがマダムと客の域を超えてしまったのはこの夜であった。

ひらやまの隣の馬入も夜十時には看板をおろした。浩吉はこの夜、馬入のおかみの

いつ子を連れて桔梗家に現われた。二人ともかなり酔っていた。
河口には平塚と茅ヶ崎を結ぶ橋があり、橋のつきるあたりは松林であった。その松林のなかの海岸道路を東に行くと、江ノ島のちかくにでる。そのあたりは鵠沼(くげぬま)海岸とよばれていた。その夜、桔梗家を店じまいした鶴子は、浩吉といつ子に誘われ、鵠沼海岸にあるあの深夜レストランに出かけたが……。
「めしをくいに行こうや」
と言いだしたのは浩吉であった。すでに午前一時にちかく、桔梗家の客は浩吉といつ子だけになっていた。
「こんな時間じゃ、もう、どこも閉っているわよ」
いつ子が言った。
「鵠沼海岸に深夜レストランがあるじゃないか。あそこへ行けばビフテキが食えるぜ」
そのレストランは鶴子も知っていた。客につれられて数度行ったことがあった。
鶴子は車をよんだ。

そして三人でその深夜レストランにでかけた。

浩吉は気が若かった。よく飲みよく食べよく喋った。レストランで食事をすませてから、三人は車で茅ケ崎に戻った。

「もうすこしのみましょうよ」

と桔梗家の前で車をとめたとき浩吉をさそったのは鶴子であった。

「わたしは帰るわ。平山さん、もうちょっと飲んでいらしたら」

いつ子は車から降りて来ようとしなかった。けっきょく、浩吉だけが降りてきて、桔梗家に入った。

桔梗家の店の奥には、四畳半の部屋がある。バーテンやホステス達が着がえをする部屋である。鶴子はその部屋に浩吉をさそい、二人でウイスキーの水割りをのんだ。

すでに三時をまわっていた。浩吉をひきとめたのは鶴子である。二人のあいだではもう言葉は要らなかった。浩吉から肩に手をかけられたとき、鶴子はぐらっと揺れて倒れた。

「おめえはいい女だなあ」

事後に浩吉が言った。

鶴子は、部屋のすみで虫がないている声をきいた。鶴子はいまでもそのときの蟋蟀(こおろぎ)のなき声をおもいかえすことがある。結婚してはじめて経験した刺戟であった。

四時頃、浩吉がひっそり帰っていったあと、鶴子もひっそり店をでた。九月の暁方の街はひっそり静まりかえっており、ときおり牛乳配達の小型自動車だけが通りすぎていった。

静岡にいる夫のことを考えたのは、帰宅して床に入ろうとしたときだった。夫を裏切ったとか、悪いことをしたとかいった感情はなく、秘密の快楽を味わったあとの歓びだけが頭のなかを占めていた。夫いがいの男ははじめてだった。男がなかに入ってきたとき、脳髄を焼火箸で貫かれたような感覚がよぎっていったが、あれはなんだろう……。鶴子は床に入ってからもその感覚を反芻していた。

つぶらな陽光のもとで河口の水が光っている。津久井の田舎には、父の兄にあたる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com